
IS fusion

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S f u s i o n

【Nコード】

N 6 6 7 9 Y

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

タイトル通り、本編とオリジナルの融合。オリ主 久遠祐希が加わったISの世界・・・彼女もまたある意味の天才だった。IS学園に入学し波乱万丈の物語が始まる！

なおこの作品えらく頻繁に他作品を引用します。その都度助言しますがご理解を。

設定・注意（前書き）

テスト前だが気にしない。

というよりは気にもしない。

テストは金曜日

設定・注意

こんばんわ。今から投稿していくのはIS＜インフィニット・スト
ラトス＞を元にしたオリ主を加えた小説です。小説自体初めて書く
ので多目に見てくだされば有り難いです。なお、文中のキャラや機
体、世界設定について自分が愛読しているお気に入り小説を参考・
・もとい引用させていただきます。その際は前書き、後書きで備考
として入れていきます。

そんなこんなで始めたいと思いますのでよろしくお願いします。

あ、あと自分は高1ですのでテスト等で不安定となります・・・
それでも読んでくだされば光栄です。

目標は、

「自分のお気に入り小説の融合」です。

それでは次回からよろしくお願いします。

一話 興味の対象（前書き）

勉強するやる気がない

テストはできないひとがすればいいといつも思う

一話 興味の対象

私は今歩いている。

何処へって？

友人の家です。私の最初の友達、篠ノ之箒と遊ぶ約束をして今向かっている。

私は毎回おもうのだけど、箒の姉さん、束さんはいつも無表情・冷酷……

今となってはあまり気にしなくなっただけど、それがただ単に興味の対象じゃないからだそうだ。

それはさておき到着！呼び鈴ならして少し待つ。そして、

「祐希早かったな、あがっていいよっ！」

箒ちゃん登場！！

「うん！ありがとっ！お邪魔します。」

私は久遠祐希^{くういつき}8歳。小2。

まあ、自己紹介はおいといて、靴を脱いで上がる。

2階に向かっていると色々とプリントを持った束さん登場。

多分今日も同じなんだろうなあと思いつつ、

「こんにちはっ」

と挨拶すれば

「……………こんにちは。」

やっぱりそっかあ。変わらないや。

束さんの腕から一枚抜けて落ちた。

祐希はそれを拾い渡そうとしたが……

その内容を見て全てが分かってしまった。

そして、

「この図は何かのグラフ…？ネットワークのような…。でも所どころによって途切れている…。自己進化の過程？」

周りからみればただのグラフ…その証拠に箸は頭の上に？を浮かべている。

だが、そのつぶやきに東は見逃さなかった。

「…！？…君、分かるの？」

「えっ、…まあ、なんとなく？なんかひらめいたから、つい」

東さんの気迫に押された！

祐希に軽いダメージ？

「じゃあじゃあ、これはどうかなっ？」

東さんの気迫上昇中？

「これは、言語認識プログラムが神経接続？その先は…脳？さっきのネットワークのようなものの通信かな？」

「凄いよ君、君も天才だあ？ 君の名前はっ！」

東さんは以前の無関心な対応が一変した。

当然その対応ができる訳なく、

「ゆ、祐希。久遠祐希です…。」

少し噛んでしまった。

「祐希ちゃんかぁ…うん！ ゆーちゃんに決定！ いつでも来ていいよっ。」

愛称が決まった！ 興味の対象となった瞬間だった。

「姉さん、…祐希いつも遊びに来てるけど。」

「えっ、そーなの。まあ、いっか☆」

「「はぁーっ…」」

落胆する筈と祐希だった。

まだこの時2人はこのさきの未来が予想できなかった。

一話 興味の対象（後書き）

今回は和利夫さんのを引用しました。

オリ主と東さんを結ぶのはこれしかないと思いました。

ここから数話は和利夫さんのを引用していききたいと思います。

二話 助手依頼（前書き）

テスト前なのに執筆する・・・
勉強嫌いじゃないけど、飽きた。

二話 助手依頼

束さんとの出会い？から数年。私は普通に過ごしていた。もちろん、篝ちゃんの家にも遊びに行ったりもしていた。その度束さんも出迎えてくれた。

そしてその時が来てしまった。

宇宙空間での活動を想定されたマルチフォームスーツ・・・

『インフィニット・ストラトス』・・・通称『IS』だ。

最初は注目されなかったけど、（束さんは学生だったため注目された）その後に起きてしまった

『白騎士事件』で一躍注目されるようになった・・・兵器として。

しかもISは「女性にしか扱えない」から各国で女尊男卑が進んでしまった。

あれから数ヶ月、私はいつもどおり暮らしていたけれど・・・

「祐希いー。電話よー。」

一階から母さんの呼ぶ声がした。私は読みかけの本を置いて部屋から出た。

「誰から？」

「それがねえ、分からないのよ。ただ、『祐希ちゃんいますか』ってしか。」

誰だろう？と思った。私に電話をかけてくるのは箒ちゃんか一夏くんしかかけてこないから。

そう思いながら母さんから受話器を受け取った。

「もしもし？」

「・・・もしもし、ひねもす？」

・・・ああ、あの人しかいないと思った。電話をかけたらいつものセリフ、これは・・・

「東さん？」

「はぁーい。みんなのアイドルっ、篠ノ之東さんだよーっ！！」

このタイミングでっ！？まあいっか。取り敢えず・・・

「何か要件があるんですか？」

「うんうん、ありあり、超アリなんだよーっ！！取り敢えず家の前にいるから出てきて出てきてっ！！」

「はぁーい。じゃ、今すぐ・・・」

「それとつ。今日は泊り込みで来てくれるかなあ？いいかなあ？」

ダメだ、これは「必ず泊まってね！」って言っているようにしか聞こえない。

「はあ、分かりました。少し待っててください。準備しますから。」

「うんうん、束さんは律儀な子は好きだよ？」

なぜ疑問形？と思いつつ受話器を置いた。

「母さん、友達の家泊まりに行ってもいい？」

泊まるなら申し出をする。これ小学生の鉄則。

「いいわよ。迷惑かけないようにね。」

すごいあつさりだ。こんなところがいいのかもしれない。

「分かった。行ってきます。」

私は準備をして、家をでた。すると目の前に束さん。

「きたきた、じゃあ行こっか！」

言われるまま私はついて行った。

数十分後、ある建物の前に到着。ここは・・・？

「ここはねー、私がISを開発した場所、『倉持技研』だよっ！」

ここがISを開発した場所かぁ・・・って私が来る場所じゃないよね。

「私がゆーちゃんを呼んだのは、私の助手になって欲しいからなのだっ!」

うん、よく聞こえなかった。

「・・・え?」

「だから、私の助手になってほしいのだっ!」

うわー、いきなりだよ、いきなり。

「なんで私なの?」

「頭がいいからだよ?」

疑問形返しは止めましょう。

「だってゆーちゃん、全国模試いもグフツ!」?

「言わなくてもいいでしょっ!?!こんなところでっ!?!」

「(・・・!コクコク)ぷはっ。ゆーちゃんひどいっ。ちーちゃん顔負けのアイアンクロー・・・!どこで習ったの?」

「千冬さん本人。」

こんなこともあろうかと私は習っておいたっ！これから先も使おう、うん。

「取り敢えず入ろう、そうしよう！」

「はい・・・」

何か上手く乗せられたような気がするけど行こう。聞くことも沢山あるし、なぜ私なのかも聞こう。そう考えながら足を進めた。

二話 助手依頼（後書き）

今回は特に引用しなかったと思う。

次回はシートさんの作品で出てくるあの人が登場するかもしれない。
倉持技研Ⅱでわかると思います。

三話 AI（前書き）

テスト一日目が終了。

気休めに投稿。

オリ機体のデータ収集集中なので感想などで意見を入れてくれると助かる。

今回はシートさんから一人登場します。

倉持技研Ⅱこの人です。

ではどうぞ。

三話 AI

取り敢えず倉持技研の中にある応接室に入って休憩中。私は束さんの真理を知るために聞いてみた。

「で、もう一度聞きたいのだけど、何故私なの？」

「もう、だから「頭がいいから」って言ったでしょ？全国模試一位のゆーちゃん？」

うわぁ、案の上の返答。

ちなみに一位は一位でも二位と50点差以上の差を付けての一位。これについて私の学校は順位を配らないなどの対策をしていたらしい。これは文部科学省の目にもつき、後日IQ検査をした。

結果、IQ180。小学生の頭脳じゃないっ……と私自身思った。とゆーか、なぜ束さんは……

「知ってるのかでしょ？私に知らないことはないのだよ……！」

この人は相手の考えることが分かるのだろうか。私も欲しいなあ、うん。

「まあー、それはおいといて。この束さんが作ったISは女性しか使えないのは分かるよね。いずれゆーちゃんも乗ってもらってから助手になってほしいとおもったからさあ。」

乗るのは確定ですか……。でも、乗りたいとは思ってたけどね。

「それでねー、あといくんを守って欲しいんだよねー。そのためにゆーちゃんに専用機を作るの。それでゆーちゃんも手伝ってもらんだ。特にAIやOS中心にねー。」

ん？なぜ一夏くん？

「それはっ、ゆーちゃんが仲がいいからだよっ」

二度目だ。心を読まないで欲しいなあ。でも専用機を作れるのは嬉しいなあ、と思ったりする。

「それでゆーちゃんは協力してくれるかな？」

うーん、どうしようかなあ。

「はい、お茶を持ってきたわよ。ん？あなたは束ちゃんのお友達？」

ドアが開きお盆をもった白衣の女性が来た。その顔立ちはとても若く、一言言うなら『美人』。

「奈々さんありがとー。この子は私の親友だよっ！」

「久遠祐希です。おじゃましています。」

「あらあら、可愛い子ね♪この子が祐希ちゃんね。私は水城奈々よ。奈々さんでいいわ。よろしくね。」

ここから、少し備考モード。

水城奈々——倉持技研最高責任者。倉持技研は奈々さんの夫が支援

している。（夫についてはシートさんの作品にて。今後出てくる可能性有り。）

年齢は40代と言っていたが、どう見ても20代にしか見えない美貌である。

ちなみに料理の腕は確かである。

―以上

「祐希ちゃん、そんなに焦らなくていいからゆっくり考えていいわよ。私も最初は驚いたのだから。」

言われたとおりだ。ゆっくり考えることにしよう。私は貰ったティーカップを傾けながら頷いた。

それからそれから、あれこれと30分ほど色んなお話をした。

「さてとっ、ゆうーちゃん、奈々さん、研究室に行こっか？ゆうーちゃんはまだ答えられなくてもISみたいでしょっ！」

正直私はISを見たかった。さっきの話は拒否してもだ。だから・・・

「見せてくれるなら見たいですっ！」

「よろしい。素直な子は束さんは大好きです！」

「あらあら、お姉さんぶっちゃって。可愛いわね♪」

奈々さんは微笑みながら言っていた。

「むう、奈々さん痛いところを．．．。」

さすがの束さんもお手上げみたい。

早速私たちは研究室に向かった。白い壁、白い床の廊下を歩いて到着っ！20秒。意外と広い。束さんはコンソールの前に立ち常人にはありえない速さで何か打っている。パスワードかな？と思っていると終わったらしい。

『パシュッ!!』

ドアが開き私たちは中に入って薄暗い中を中央にある「物体」に向かって歩いた。着いたとたん部屋の明かりが付いた。

灰色の機体が鎮座している。そのシルエットはまだ研究中！という雰囲気。私は思わず、

「I S．．．。」

とつぶやいた。束さん、奈々さんは私を見て微笑んでいる。どうも私の顔に興味津々．．．

「って、近いんですけどっ！」

「「あっ、ごめんごめん。つい見とれちゃって。（てしまって。）」」

仲いいなあと思いつつ、聞いてみることにした。何を？決まっている。

「触っていい？」

二人は顔を見合わせ、「うーん。」と少し考えていた。そして、束さんが

「これはちよつとね。I Sはね国家機密でもあるから普通の人が勝手に触っちゃいけないんだあ。でもねでもねっ、この倉持技研の研究員、つまり私のお手伝いの件をOKしてくれたらだいじょうぶなんだよっ！」

やっぱりそうきた。でも私はこれを見た瞬間決めていた。

「うん、私は束さんのお手伝いをするっ！……でもお母さんとお父さんにも言わないと……。」

「そうよねえ。流石に小学生が決めてもいいけないからね。じゃあ、一応仮契約の段階で進めましょうか。政府も祐希ちゃんのこと承諾してくれるだろうしね。両親には明日説明しましょうか。それでいい？祐希ちゃん。」

それは妥当だなあ。政府が承諾してくれても契約していなければ条約違反になっちゃうだろうし。

「分かりました。お願いします。」

「じゃあじゃあ、触っていいよっ！」

私は恐る恐る近づき……触る。

その瞬間あらゆる情報が流れてくる。

「コア・ネットワーク・・・接続未設定。ハイパーセンサー・・・構築中。P I C < パッシブ・イナーシャル・キャンセラー > ・・・構成中。シールドバリアー、及び絶対防御・・・構築中。ワンオフ・アビリティ < 単一使用能力 > ・・・構築中。プリセット初期設定・・・未設定。バススロット拡張領域無しイコライザの為、後付装備・・・未設定。e t c ・・・」

・・・コア・ネットワーク A I システム、「久遠祐希」による設定の為、未設定。e t c ・・・」

・・・何故 A I システムは私が設定する事になっているのかなあ？
前々から考えていたのかなあ？

「ちなみにね、ゆうちゃん。この子の A I システムについてはゆうちゃんに設定してもらおうと I S を『開発したとき』からかんがえていたんだよっ！」

やっぱり・・・。

「なんでそんなときから？」

「面白そうだからさっ！」

きました根拠なし攻撃。私は落胆というダメージを・・・

「でもねでもねっ、全国模試は I S が発表される前でしょ？採点が終わった瞬間、私の全情報収集能力を行使してゆうちゃんのデータを得たんだ。そのとき私が決めたんだよ。」

受け流した。とゆうか束さんには尊敬しかない。どんな情報収集を

したんだろう？

「それでそれで、A Iの開発してくれるかなあ？」

私は少し考えたが、言うまでもない。答えはこれしかない。

「・・・やります！私はI Sをもっと知りたい！」

「じゃあ、私とI Sの基礎から学びましょうか。わからなかったらなんでも聞いてね♪」

「はい、わかりました。」

「東さんは新しいI Sを作ろっ♪」

その日はI S 漬けになったことは言うまでもない。

三話 AI（後書き）

シートさんの「Verweile doch, du bist so schön」より水城奈々さんを引用しました。性格がいまいち再現しにくかった。駄作で申し訳ないです、シートさん。

本編にはあと2〜5話（大まかですみません）かかると思います。

前書きでも書きましたが、感想をお願い致します。

四話 最年少の研究者（前書き）

テストなんて知るものか。

適度にやればそれで良し。

それではどうぞ。

四話 最年少の研究者

倉持技研で泊まった次の日、私は一旦報告のために家に帰ることを決めた。束さんの助手、もとい倉持技研に所属することになるため、奈々さんが同行してくれることになった。

一方、残って開発するといった束さんは――

「ほいほいっと。そして次は――」

現在絶賛作業中。天才と言われるだけの技術力もある。空中投影パネルを3つ浮かべ並列作業をまるでマシンガンのようにこなしている。

「それにしても、ゆーちゃんは行動力があっていいね。それと昨日の学習力には驚くなあ。」

昨日は奈々さんとゆーちゃんですISの勉強をしていたのだ。私は新しいISの開発をしていたのだけど……

驚愕の2文字以外ありえなかった。ゆーちゃんは奈々さんが教えたこと全てをその場で理解していた。なんという学習能力、いや完璧な理解力だね、うん。

「そーいや、私がゆーちゃんを誘った理由はなんだったっけ？ うん……あれだっ！」

時は全国模試終了後。当然その頃の私はゆーちゃんと親しかった。あの時に拾ったプリントを見てあそこまで理解するなら学力も高いはず！……そう思ってあらゆる手段^{ハッキングも}を使用して情報をGET!! 点数が異常だったがそれは気にしない。予想の範囲内だね。IQも、……予想通り。私並みだね。

しかし、このあと問題用紙の裏に書いてあった情報を見て驚いた。普通は問題用紙の裏なんてだれも記録しないのだが政府は学力に驚いて残してあったのだらう。（問題の解答途中を見るためだらう）

私と会った時のプリントの内容がそのままそっくり書いてあった。しかも改善法まで。その改善法は私の改善法とほぼ一緒だった。ゆーちゃんが何を考えたのかは分からないけどその上から鉛筆でなんども斜線が引かれていた……多分漏洩防止だらう。

……作りたい。ISをこの子と一緒に。ただそれだけ。この子に私の欲望を実現させるなどといったことはなく、「単純に」作りたい。どこまで極められるかを。

「これから作れるんだなあ♪一緒に！そーいえば今頃どうなっているのかなあ？」

——久遠家

「それで、祐希はどうしたいの（か）」

わあ、同時発言。流石私の両親、仲睦まじい。この年になってもう

ブラブなのはどうかと．．．ん？年齢？父さんはよくても母さんは言うとな怒られるなあ、うん。

それはさておき、奈々さんから昨日話し合った事情を説明してもらった。両親は動揺することなく、比較的にラックスして聞いていた。途中感嘆の声を上げていたけど、それでいいのか両親よ。

「私は．．．なりたい。研究者に。私の手でISを作りたい．．．！」

「「じゃあ、水城さんよろしくお願いします。」」

早っ。また息ピッタリ。どうなんだろうこの夫婦は。

「えーと．．．、本当にいいんですか？」

さすが奈々さん。重要だから念入りに確認してくれる。尊敬します。

「ええ、祐希がやりたいことを見つけたんです。それを助けてやらなくて親とは言いませんから。」

嬉しかった。私は世界で一番いい親を持っている。父さん、母さんのためにも頑張らなきゃ！奈々さんは両親の答えに対して

「分かりました。では正式に久遠祐希ちゃんを研究者として迎えます。それと給料についてですが．．．」

「ああ、それなら祐希の口座を作るのでそこをお願いします。」

「えっ、いいの父さん？」

そりゃそうだ、小学生にお金を渡すようなものだから。

「おう、祐希が頑張って得るお金なんだ。研究にでも使えばいい。家族の分は父さんが働くから大丈夫、心配ない。」

嬉しいことに限らない。だから私は、

「分かった、ありがたく使います！」

「おう、頑張れよ祐希。それと水城さん、質問と意見があるのですが・・・」

「はい、なんででしょうか？」

「学校は今まで通り通えるんでしょうか？」

「はい、それについては政府に承諾してもらい、世間に研究者になったことを伝えないよう配慮してもらいます。」

「分かりました、それと本人の希望に応じて昨夜のように泊まらせてもらってもいいですか？夜中に帰宅させたくはないので。」

「はい、もちろん構いませんよ。あとほかの小学生のように普通の生活を遅らせるよう配慮します。」

「有難うございます。それでは祐希をお願いします。」

「分かりました。ではお邪魔いたします。」

こうして約1時間に渡る契約が終わった。それにしてもどちらにも泊まれるのは嬉しい。研究所が校区内でよかった。

「じゃあ、父さん、母さん、研究に行ってきます。」

「ああ、無理しないようにな。」

「迷惑をかけないようにね。それと、いつでも帰ってきてなさい。」

「うん、ありがとう！行ってきます！」

「「いってらっしゃい。」」

そして倉持技研へ歩いた。空は昼間なのでとても明るく、雲ひとつなかった。

「いい親持ったわね、祐希ちゃん♪」

「はい！そして自慢できる両親です！」

「じゃあ、束ちゃん待ってるだろうから急ごっか！」

「はいっ！奈々さん！」

——研究室

「出来たああ！これがああ・・・ゆーちゃんの専用機の装甲だああ！」

研究室の真ん中に鎮座していたIS。まだデータ入力が終わって
なかったが装甲が完成していた。その配色は白主体の黄色のライン。
装甲はともシャープなラインで形成されていた。

まるで『天使』のように・・・。

四話 最年少の研究者（後書き）

長かった。勉強、本気でやらないと終わらない．．．！
頑張ろう。

次回はI S学園試験前まで飛びます。
感想よろしく願います。

五話 白堊<シロスミレ>(前書き)

テスト終了！

テストの詰めは見直しではなく機体構想を練っていました(笑)

ネーミングが難しいのなんの・・・誰か知恵を！

ではどうぞ。

五話 白董<シロスミレ>

——アタシが研究者になって数年の時が過ぎた。今の私は高校受験生。周りは日々勉強に取り組んでいたけれど、アタシは全くと言ってもいいほど勉強していない。

なぜか。

——『IS学園』を受験するからだ。

アタシは小学生の頃からISの研究をしていたものだからほかの受験者より豊富な知識、それと研究するたびに試運転もしていたため操縦技術も自然と付いてきた。もちろん、普通の教科も入学すれば勉強する。

でも、勉強する必要がない。小さい頃から理解力と記憶力、柔軟な発想力はずば抜けていたから教科書を軽く読み返すなどをすれば問題はない。

ということで私は自分自身に感謝しながらISの研究をしていた。現在10時。しかしアタシは度重なる徹夜ですぐにも寝てしまいそうだった。すると手元にあったケータイが軽快なリズムを奏でながら電話を受信したことを告げている。その液晶パネルには見慣れた人物の名があった。

『篠ノ之 箒』

アタシは頑張って腕を伸ばしボタンを押した。

「もすもす・・・？」

「もす？元氣無いな祐希。ちゃんと寝ているのか？」

「ん、寝てないよ。只今絶賛3日連続徹夜中」

「おいおい、大丈夫なのかそれで・・・？まあ、それはおいといて」

おいとくのっ！と心の中で突っ込むアタシ。

「それで祐希は何処を受験するんだ？」

「え、知らないの？」

「知らないぞ」

そりゃそうだ。教えてないんだもん。

「ん」と、IS学園」

「本当かつ？そうかそうか、よかったあ・・・」

「なんで？」

「知っている人がいると安心するからな」

「まあ、それもそーだねえ」

アタシも周りが知らない人ばかりだったなら孤独で死んでしまいそう
だ。いや、兎じゃないけど。

筈がIS学園に入学するのは当然だろうとも思っていた。なにせ『

実の姉が『ISの開発者』だからだ。

「でも、また箒ちゃんと生活できると思うとアタシはとても楽しみになってきましたよ？」

「私もだぞ祐希。しかしいつ受験なのだ？」

「明日だよ」

「ええっ！？ごめん、こんな時に掛けてしまって・・・」

「謝らなくていいよっ、むしろこんな時に掛けて欲しかったよ」

「え？」

「アタシは箒ちゃんとかーやってお話するのがとても楽しいから。それに箒ちゃんに会えるならこのくらいの試験どーってことはない！」

「このくらいの試験って・・・でもありがとう、祐希。じゃあ、またな。こんどは・・・」

「『IS学園でっ!!』」

「『・・・フフツ、じゃあまたね(な)』」

通話を終えたアタシはケータイを机に置き、ベットに身を投げ、仰向けになった。

「・・・でも、実際は合格したようなものだけどね」

実際のところ私は束さんから強制入学・・・ゴホッゴホッ、推薦をもらっていた。でも非公式なもんだから出向かなければならなかった。IS学園の試験にはISの試験稼働・教員との実践も含まれている。束さんはそこで私の専用機を渡すらしい・・・「ゆーちゃんにはいっくんと箒ちゃんを守ってもらわなきゃ！これはそのための剣だよっ！」のことだ。

あれ以来私はあの機体と会っていない。どうなっているのかとても楽しみだ。

——次の日アタシは試験会場にいた。しかし専用機を貰うので最後になると千冬さんから連絡があった。束さんが教えたのかな、きつと。そんな訳でアタシは施設を暇つぶしに回っていたのだけど・・・

ありえないことが起きた。ある待機室になぜか一夏くんがいる。しかもISが反応している。

「何やってるの？一夏くん？」

「祐希・・・動いてしまった・・・ISが」

この瞬間束さんが言った「いっくんを守ってね」の意味が全て分かった。

「はああああああ・・・」

——色んなこともあり最後のアタシの番になった。放送で指定された待機室に向かっている。

「ここかなあ？」

扉をひらくと二人の影が見え、その奥に『物体』がある。

「やっと来たか。祐希。」

「やあやあ、ゆーちゃん！久しぶりねえ。実際に会うのは何年ぶりかなあ？」

黒いスーツをピシッときめた黒髪の織斑千冬さんとうさみみカチューシャをつけた篠ノ之束さんがいた。

「さっきは一夏がすまなかったな。……あとで罰を与えよう。う。」

「……ほどほどにしてくださいよ？」

「わかっているさ、冗談だ」

全然冗談に聞こえないのは何故だろう？

「ふっふっふ……ついに完成したよ！ゆーちゃん専用IS！その名は……シロスマイレ白堊！」

束さんが言った瞬間、後ろの『物体』にライトが当たった。

「白堊・・・」

アタシは思わず呟いた。その機体の美しさに・・・

五話 白堊<シロスミレ>（後書き）

祐希は和利夫さんのツバメさんを引用しています。唯一の違いは転生者でなく、中身も女の子というところです。

次回は白堊の戦闘描写を書きたいと思います。

六話 初対戦（前書き）

そのまま流れで書きました。

ではどうぞ。

六話 初対戦

白堊・・・そう呼ばれる機体はとても美しかった。

機体は白で構成され、比較的シャープなこの機体に黄色のラインが入っている。

白堊・・・花言葉は『誠実』。その意味は機体に合っている。何より動きを邪魔とする部分が見当たらない。アンロック・ユニットであり、機体の推進力として使われるウイングスラスターも白主体の輪郭が黄色のラインで構成され、それは天使の翼として見れる。

「それではゆーちゃん、フォーマットとフィッティングをはじめよつか！」

「さて、束。」

「なにになに？ちーちゃん」

「あいにくだがこのアリーナは使用時間が決まっている。時間が無い。仕方ないが祐希には実践でもらうしかない。」

「なんだとお！？」

「そっかー。まあゆーちゃんならできるさ」

他人事のように言ってくれるなあ。まあ仕方ないかな、うん。

「わかりました。できるだけ頑張って見ます。」

「ゆーちゃんには期待してるよ！」

「すまないな、祐希。頑張れよ。」

「はいっ!!」

——アタシは白堊を展開してカタパルトへと移動した。後は相手の準備を待つだけ。取り敢えずどんな機体なのかな？そう思いアタシは機体のスペックデータを表示した。

——コアナナンバー003・・・白堊 初期設定
武装・・・近接ブレード×1 ハンドピストル×2

機体詳細は初期設定の為開示できません。

「やっぱり初期設定のままだとダメかぁ・・・。出来るだけ動いてフィッティングを円滑にしないと・・・」

「試験を開始します。受験者、久遠祐希さんはアリーナに出てください。射出タイミングを譲渡します。」

「はい、では行きます！」

心地よいGが身体にかかる。最初は苦手だったがもう慣れている。アタシは5秒と掛からず上空にでた。

「それでは機体テストを行なってください。自由に動いて構いません。」

アナウンスを聞き、ターンや急上昇、急下降など基本動作を行なった。やはり専用機というだけあり、思うように動いてくれる。

「では、実技戦闘を行います。相手はIS学園教師、山田真耶先生です。」

「久遠さんですね。よろしくお願いします。」

「はい、こちらこそ。」

「では・・・始めっ！」

試合開始のブザーが鳴った。

「よし、行きます！」

「どうぞ！」

キーン！！

開始早々、アタシと山田先生は近接ブレードを展開、加速して競り合いとなる。ちなみに山田先生はラファール・リヴァイズを使用している。

「さすがですね、久遠さん！無駄がありません！」

「ありがとうございますっ！」

そう言いながらアタシは空いている左手にハンドピストルを展開。競り合いながら撃ちまくる。

「くっ！やりますね、でもっ！」

山田先生は即座に反応して左肩のシールドユニットを前にせり出した。同時に右手の近接ブレードを収納、アサルトライフルを展開し反撃してくる。

ダダダダダダダ！

ほとんどの弾がアタシのシールドバリアに当たる。

——ダメージ67、シールドエネルギー残量、733。実体ダメージレベル低。

「くっ！！（まだシールドエネルギーはあるけど長期戦はやばいかも・・・接近戦に持ち込もう。）」

アタシは銃弾をランダム回避で避けながら突っ込んだ。しかし、それが甘かった。

「近づきすぎですよっ！」

叫びながら山田先生はアサルトライフルを収納、両手にハンドピストルを展開し連射してきた。

「っ！きゃあああ！！」（このままじゃ終わってしまう・・・！）

ダメージも今ので重なり、シールドエネルギーも半分までなくなる。

誰もが山田先生が勝つと思っていた。だが・・・

——フィッティングが完了しました。ファースト・シフト 一次移行を行います。

「（待ってたよ！白堊！）」

アタシは囫にハンドピストルを両手に展開、銃弾の嵐に投げ、小爆発を起こさせた。山田先生もこれには驚きダメージを食らった。

——高粒子圧縮エネルギーシールド展開。

その瞬間、私は目の前が真っ白になった。

目を開けると周りは雲一面。上には青い空が広がっていた。

その雲の上に白いワンピースの一人の少女がいた。アタシはその子に向かって歩いた。

「あなたは誰？」

私は唐突に尋ねた。その少女は振り向き笑顔で答えてくれた。

『私はあなたのIS、白堊の制御人格！』

「あなたが？アタシは久遠祐希！よろしくね・・・名前は何？」

『私には名前がないの・・・だから名前を付けてくれない？』

「そうねえ、んゝと。スマレってどう？呼びやすいし、白堊だからね」

『うんっ！ありがとう！よろしくねっ！それとこの世界から出たら私とはプライベート・チャンネルで会話できるよ！』

「分かったわ。そういえば一次移行って終わったの？」

『うん！たった今終わったよ！それじゃあ・・・』

「『行こっか！』」

ここはビット。今は千冬と束しかないが。

「ほう、ハンドピストルを投げ、煙幕がわりにしたか。」

「さっすがゆーちゃん！それに一次移行が始まったね！」

ビットや山田先生からの視点で見ればそれは不思議としか言いようがなかった。

通常よりも強固なシールドバリアを張り、そのバリアにはIS関係の語句がまるで中を見せないように流れていた。

「これは・・・コアナンバー1003の効果か？」

「うーん、よくわかんないね。あのコアはゆーちゃんが調整していたからね。面白いからそれで十分だよ、束さんは！」

「・・・はあっ」

呆気ない回答にため息をつく千冬だった。

「どーやら、終わったみたいだね。ちーちゃん」

「そうだな、ここからが見物だな。」

——煙がほとんど消えた先に白堊は居なかった。誰もが驚愕していたが、ひとつの影がありその先を見上げる。

太陽に被っていてそれは『天使』だった。

ウイングスラスターが初期設定から、より天使の翼のように曲線を描いていた。その翼には羽の代わりにビットが付いている。

さらにウイングスラスター上部にアタッチメントが新たに付き、そこには二本のソードが装着されている。

「山田先生・・・遅れました。いつでもOKです！」

「はいっ！それでは行きましょう！」

「行きますっ！！（スマイル、最大出力！同時にショートソードを両手に展開してっ！）」

『オッケー！任せて！』

白堊は初期設定の2倍ほどの加速をして突っ込む。そして、山田先生の横を通り過ぎる。

山田先生はその加速に追いつけず、また通り過ぎた衝撃が襲う。

「くっ！！（なんて加速力！これは第三世代トップレベルでしょうね・・・。）」

通り過ぎた瞬間白堊は反転し、ショートソードを投擲する。

それはまともに当たりシールドエネルギーが削られ、一瞬怯む。

その隙を見逃さずウイングスラスターから二本のソードを取り、切りつける。

しかしそれを予測していた山田先生は後ろへ下がりと、ハンドピストルからアサルトライフルに換装して撃ってきた。普通ならばよけることができない……だがそれは「普通なら」だ。

「（スマイレ！ シールドビットをショルダー・シールドモードにして両肩装着！）」

『分かった！ シールドビット、展開！』

一瞬にしてシールドを形成。全弾を防ぐ。当然、山田先生は……

「そんなっ！ 一瞬にして!？」

という反応をする。だがその反応が勝負を決めた。

シールドは肩に付いている。つまり両手にはソードが握られている。

「今だっ！」

キーン！ キーン！

重い斬撃が山田先生を襲い、そして……

「試合終了、勝者．．久遠祐希」

六話 初対戦（後書き）

初めての戦闘描写でした。
疲れた。

感想お願いします。

七話 **SunLight Drive System**＜ソルドライヴシステム＞

機体設定にハマってしまいました。

しかし今回出るSLドライヴはネーミングに悩みました。

命名理由は単純ですけど。

それではどうぞ！

試験が終わったアタシはビットへ帰還し、ISを解いた。そこには既に千冬さんと束さんがいる。

「ご苦労だった。まあお前はどこかの馬鹿者の仕業で強制入学だな。入学までの間気を抜くなよ」

そういえばそうだった！もうちょっと気楽にやればよかったなあ……。でも帰ってきていきなりその発言はやめてください。あなたは鬼ですか？そもそも一夏くんにも同じ態度とっていますけど私にはどう見てもブラコン……

「今私の悪口を考えてたな？……次は特別組手をプレゼントしようか？」

前言撤回。申し訳ありませんでした。

——ユウキ……。私はAIなのに織斑先生？から威圧感を感じるんだけど……

——ほんと？……AIにも伝わってるってヤバくない？

——そのうち私の存在もバレるんじゃないかなあ？

——それはないでしょ。

――・・・。

――・・・。

――「ありえそうだった！」

「んーちゃん、ゆーちゃん終わったばかりだから休ませてあげなよ、ね？」

「?!・・・・・・ そうだな、これぐらいにしておこう。それにしても祐希、動きが良かったじゃないか。」

「うんうん、束さんはとっても満足したよう。『アレ』は十分使えるね！」

「はい、アタシも初めて搭載したISにりましたが『アレ』は実践で十分使えますよ。あとちょっと微調整をして・・・」

「おい？アレとはなんだ？」

千冬さんはアタシたちの会話に出てきた『アレ』の意味が解らないように質問してきた。

「『アレ』とはですね・・・・正式名称SunLight Drive System・・・・通称SLドライブソルドライブです。」

「聞いたことがないな。どんなシステムなんだ？」

「はいはい！それは私に任せてちーちゃん！厳密に言うシステムよりエネルギー機関なんだけどね。これはね『自由に粒子を生成する』機関なんだよ。」

「自由に？どういうことだ？」

千冬さんは頭を傾げる。

「それはアタシが説明します。これはアタシが考えた理論で束さんと開発した粒子を制御する機関なんです。『自由に』とはですね簡単に言っちゃえば『粒子の増幅を任意で可能にする』ことが出来るんです。他にも粒子を圧縮・収束して高濃度にするとかが出来ます！」

「・・・それはいくらなんでも異常ではないか？」

「でもねでもねっ、ちーちゃん。これには欠点の一つに生産がゆーちゃんと私しかできないんだ」

実際この機関はまだ発表していない。というよりまだ欠点が沢山あって発表できないんだけど。その欠点に機関を構成するための物質が入手困難というのもあるんだけどね。

「なるほど、だからあの加速を実現でき、どこにも例が無かったのか。納得ができるな。しかしなんで『太陽の光』なんだ？」

納得してもらえて良かったです、はい。ネーミングはねえ・・・

「放出される粒子が太陽の様に輝いていて、名前決まってなかった

からです。」

「・・・さて、これで入試の全日程が終了した。今日もこれで終わりだ。束、祐希。今日はもう帰ってもらって構わない。それと祐希、学園では織斑先生と呼ぶように。分かったな？」

ええ、聞いておいてシカト！？それはないでしょ。でも疲れたしね。早く帰りたいね。

「はい、分かりました。じゃあ千冬さんお疲れ様でした！」

「じゃね、ちーちゃん！」

「ああ、お疲れ様」

――アタシと束さんは途中公園に寄って帰ることになった。

「それにしてもゆーちゃん、あの飲み込みの早さに束さんはびっくりだよ？」

「フフッ！ありがとうございますっ！」

「そうそう、これ。今日の戦闘でのSLドライブの改善点をまとめといたから、使って！」

束さんは一つのメモリースティックをアタシに差し出してきた。

「えっ、いいんですか！じゃ、遠慮なく使わせてもらいます。」

「全然オツケーだよっ！その代わり『紅』についてのデータを端末に送るから、感想と改善点を出してね？」

「はい、もちろんです！」

「じゃあゆーちゃん、またねっ！」

そう言って束さんはものすごい速さで去っていった。絶対、ISつけてるな。

——ねえユウキ？

——なあに？

——篠ノ之博士って何者？

——天才だけど、千冬さんの言葉を借りるなら「馬鹿者」じゃないかなあ？

——ああ、なんか理解できるよ……。

——そうだねえ…… 取り敢えず帰ってお話しながら再調整しようか。まだまだだしね。

——うんっ！了解！

もう空は赤くなり始めていた。

七話 **S u n L i g h t D r i v e S y s t e m**＜ソルドライヴシステム＞

もうそろそろ本編に入れそう．．．かな？

次の次に入ります。

感想をお願いします。

設定（前書き）

取り敢えずまとめました。

設定

くわいゆうめ
久遠祐希 15歳 女の子

和利夫さんのIS 〈Blue Swallow〉、主人公八雲ツバメをモチーフにしている。

違いは転生者ではなく、中身も女の子であること。

髪は黒に近い紺色。長さは楯無さん位。

小学生で倉持技研研究者登録。理解力と記憶力、発想力に長けている。運動神経も代表候補生並みでISの操縦については度重なる試験稼働でトップレベル。SLドライブなどを開発し、戦術も作り上げている。

一夏と箒、鈴と親友でそれぞれ「一夏くん」「箒、箒ちゃん」「鈴ちゃん」とよぶ。

コアナンバー003...シロスマイル白堊 第3世代型試験機 現在第1形態

―――防御・接近戦に重点を置いて開発された高速機動型試作機。カラリングは白に黄色のライン入り。アンロック・ユニットのウイングスラスタはOOのアリオスの背部のウイングユニットを外した状態。その外したウイングの間はアリオスは空洞だが、そこにビットを接続させ翼を再現させている。装甲はミステリアス・レイディ並みに薄い。それによる軽量化で機動性を大幅に上げている。

――武装――

ロングソード

――ウイングスラスタ―上部のアタッチメントに装着可能。計2本。ロングとあるが大きさは雪片式型・雨月・空裂並みの大きさで、下記のショートソードと区別するため。現在は実体剣。

ショートソード

――リアスカートに装着可能。計2本。大きさは〇〇のエクシアのGNショートブレイド並み。現在は実体剣。

ハンドピストル

――リアスカートに装着可能。計2個。SL粒子をビームとして発射する。取り回し、連射に優れているが、威力はライフルより低め。

シールドビット

――ウイングスラスタ―に常時装着。計8機。装着時はスラスタ―として機能する。SL粒子の貯蔵をすることができ、ある程度なら自立移動が可能。表面にビームシールドを展開できる。貯蔵している粒子がなくなりかけると、ウイングスラスタ―で補給される。ビット間での接続枚数により機能が変更する。

――1・2枚・・・遠隔操作による展開でビームシールドを発生する。3枚以上の接続も可能。

――4枚・・・ショルダー・シールドモードとなり、肩に装着可能。操縦者の許可によって他機体にも装着可能。

ビームフィールドモード

——シールドビットを8枚展開し、自分の周りにビームフィールドを形成。ただ、SL粒子を消費しやすくなるので自機以外の展開は望ましくない。

補助AIシステム

——制御人格が表に出てくる。AI名『スマイレ』
武装展開、期待制御などの補助を可能とする。AIとの会話は外部音声、プライベート・チャンネルで可能。待機状態でAIのホログラフィックを投影可能。他設定有り。

オーバーブースト

——シールドビットをすべて解除し、貯蔵しているSL粒子+生成したSL粒子を放出する。その間シールドビットはシヨルダー・シールドモード、または両腕・両足に1機ずつ装着し、1枚シヨルダー・シールドを形成して対応する。スマイレによる展開も可能。
オーバーブースト時は機動力が格段に上がる。放出したSL粒子はビーム兵器の威力を弱める効果がある。機体は金色の粒子で覆われる。途中解除、限定発動も可能。

設定（後書き）

次は本編です。いろいろ考えてます。

感想をお願いします。

八話 お茶会 i n I S 学園私室（前書き）

週末です。待ちに待った週末です。

やっと休める。何話書けるか楽しみです。

入学の前に一話入れることにしました。すみません。

ではどうぞ！

八話 お茶会 in IS学園私室

入試から半月ほど経ち、アタシは明後日が入学式だから入寮することに決めた。IS学園は全寮制。だからアタシは早めに家を出て入ることにした。今準備が終わったところ。

「母さん、準備終わったから行ってくるね」

玄関で靴を履きながら後ろで見送ってくれる母さんに言った。

「もうあの頃からこんなに時間が経ったのねえ……。やるからには頑張りなさいよ？ いつでも帰ってきなさい、楽しみにしてるから」

「うん！ じゃ、行ってきますーす」

「はい、行ってらっしゃい」

アタシは大きめのバッグを肩にかけドアを開けた。

さあ、出発だ！

家を出て小一時間。やっとたどり着いたよ……。IS学園。校舎はとても綺麗だった。案内図を片手に事務室へと向かった。その途中で見たことのある人に会った。

「・・・山田先生？」

「はい！・・・あつ、久遠さん！お久しぶりですね。そして合格おめでとうございます！」

やや大きめの傾いた眼鏡を上げながら挨拶してくれた。

「ありがとうございます！すみませんけど事務室はどこですか？入寮するので・・・」

「構いませんよ。なにせ先生ですから！」

自信満々に答えてくれた。うーん、やっぱりこの人は人受けがよさそうだね。

山田先生はそのあと入寮許可の手続きを手伝ってくれた。有り難いです、本当に。

「それでは、入寮が承諾されました。改めてこれからよろしく願いいたしますね。それではこれが久遠さんの部屋鍵です。ちなみに久遠さんの一人部屋です」

そう言って鍵を渡してくれた。

「ありがとうございます、色々してもらって。申し訳ないです」

「気にしないでいいですよ。ちなみに久遠さんは1組で担任は織斑先生、副担任は私です！」

わお、千冬さんが担任か・・・気を付けよう。

——ちゃんと勉強しないといけないね。

——そうだね。・・・はああああ。

——ドンマイ、ユウキ。

「それとこれを渡します。トラブルが生じたら私か織斑先生に連絡してくださいね？」

そう言って携帯電話を渡された。

「じゃ、これで失礼します。」

「はい。では入学式で会いましょう！」

数分歩いて自室のフロアに到着。えーっと、1026号室、1026号室と、あった。

鍵を開け部屋に入る。

「広っ！しかもバスルームや簡易キッチン、ベットもある！さっすが国立！」

一人で使うのにはとても広かった。取り敢えずアタシは事前に通っていた荷物や持ってきたバッグの中身を整理した。数十分で作業は終わった。取り敢えずお茶にしようかと思ったら・・・

コンコン。

ノックが鳴って私は誰だろうと思いながらドアを開ける。

「わあゝ、ビックリだよおゝ。こんにちわゝ。」

小動物がいた。とゆうかこの子は確か・・・

「えゝと、あつ、布のぼとけほんね仏本音さんかな？」

「むゝ、なんで知ってるのゝ？ 久遠祐希博士ゝ？」

「あなたもなんで知ってるの？」

「それはねゝ・・・」

アタシは彼女に近づき耳元で言った。

「更識家専属で仕えていて、情報網に詳しいから？」

「・・・むゝ、よくご存知で。博士も裏の情報に詳しいのかなあ？」

「ううん、たまたま見つけたただだよ。お茶していく？ ちょうど暇だしね」

「えっ、いいのおゝ？ じゃあ遠慮なくゝ、おじゃまします。」

アタシはお茶の準備をして、ティーセットが乗ったトレイを持っていった。

「あゝ、ありがとう。いただきまゝす。」

「はい、どうぞ」

少し紅茶を飲み、会話を楽しむことにした。

「ねえ、博士はちょっとね・・・」

「じゃー、ユツキーでどうかなあ？」

「じゃそれでいいよ。アタシは本音ちゃんていいかなあ？」

「ぜーんぜんいいよお。そーいえばユツキーは専用機あるのお？」

ものすごいローペースで喋っている。ものすごくリラックス出来るんだけど・・・

「うん、白堊って言うの。ちなみに第三世代型試験機だよっ！」

アタシは白堊の待機状態の白い指輪を見せながら言った。

「ふゝん、ぜひぜひ見てみたいよお。」

「ダメだよっ、勝手に展開したら怒られちゃうでしょ？」

「それもそくだね。」

こんなスローペースなお茶会を夕方まで楽しんだアタシたちだった。

時間は8時。夕食・お風呂を終えてベッドに腰掛けた。

「ねえスマイレ？」

『なあに？』

今は誰も居ないので外部音声・ホログラフィックを出して会話している。

「アタシの考えた武器やプログラムをスペックデータ化したり、設計図を作ったり出来る？」

『うん！入力さえしてくれたら数十分かかるけど出来るよ？』

「そう、ありがと。じゃあ何かアイデア思いついたら言うね」

『はぁーい。』

会話を終えてベッドに身をあずけることにした。うん、入学式が楽しみだね。そう考えながら深い眠気に意識を任せることにした。

八話 お茶会 i n I S 学園私室（後書き）

のほほんさん登場しました。

なかなか存在感あるので、はい。

次は入学式です。

感想よろしくお願いします。

九話 入学初日 part1 (前書き)

二冊目書くぜ！

Let's go！

九話 入学初日 part 1

一夏side

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRははじめますよー。それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。いや、多分俺のせいなんだろうが。

「じゃ、自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で。」

先生うろたえてるよ・・・・。反応するべきか・・・・？いや、そんな余裕はない・・・・！

なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。つまり男は俺一人。やはり・・・・

（これは・・・・・・・・想像以上にきつい・・・・・・・・）

助けを求めよう、それが無難だ。まずは・・・・っと箒だな。俺はちらっと窓側にいる幼なじみ・・・・篠ノ之箒に目をやった・・・・助けてくれっ！

だがその願いは叶わなかった。

視線を送った瞬間、・・・薄情なことに箒は窓の外に顔をそらした。なんてやつだ。六年ぶりに再開した幼なじみに対する態度だろうか。この世界に神はいない。・・・いやいや、もしかして俺嫌われてるんじゃないか？

箒への救援 call 失敗。

ならばもう一人の幼なじみだ。祐希だな。確かあいつは・・・右後ろだ。頼む！今度こそ・・・ん？

俺は教室の後ろ端にいる幼なじみ・・・久遠祐希に目をやったんだが。

口を両手で抑え、声を殺し、ややうつむいて、小さく震えている。

（あいつ！苦しんでいる俺を見て楽しんでやがる！）

「・・・くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

裏返った声を上げてしまった。うゝむ。周りからくすくすと笑い声が聞こえる。無論祐希もその内に入る。

「あっ、あの、大声出しちゃってごめんね。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね。でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。自己紹介してくれるか

な？だ、ダメかな？」

「いや、そんなに謝らなくても．．．。」

さつきからむちゃくちゃ頭下げてる。罪悪感が．．．。よし、気を
取り直そう。まず、後ろを振り向こう、そこからだ。

(うつ．．．．．)

背中への視線と真正面の視線は違う．．．！くそっ！全員して．．．
。ああもう、やればいいんだ！

「えー．．．．．えっと、織斑一夏です。よろしくお願
いします。」

ってあれ、なんだよその『もっと色々喋ってよ』的な視線は．．．
それに、

「これで終わりじゃないよね？」

．．．！？祐希の奴、追い討ちかけやがった！しかも全員その言葉
に賛同してるし。

「．．．．．」

どうすりゃいいんだよ．．．。

祐希 side

（あー、一夏くんの反応面白すぎっ！）

さっきから一夏くんの背中がちっちゃく見える。

（ダメだ、我慢できないっ！）

必死に堪えて、口を両手で抑え、声を殺し、ややうつむいて、小さく震えている。

「えー………えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

えっ、それで終わるつもりかなあ？祐希さんが追い詰めてしんぜよ。

——ユウキ、いじめすぎだよ……

——このくらいが一夏くんにはちょうどいいのよ

——そうなの？

——そうなんです。

「これで終わりじゃないよね？」

あはっ、一夏くん震え上がったよ、面白っ！……あ、深呼吸してる。

クラスのほとんどがその行為に息を呑む。しかし期待はずれだった。

「以上です」

がたたつ。あちゃー、一夏くんそれは無いでしょ。

「え？あれ？ダメでした？」

ドンマイ、一夏くん。後ろには『あの人』がいますよ？

パアンツ！凄まじい威力だね、千冬さん。いや、「織斑先生」。あ、恐る恐る後ろを向いてる。結果は変わんないのね。

「げえっ、関羽!？」

あ、それはダメ。

パアンツ！本日二度目。一夏くんの脳細胞さん1万人お亡くなりになりました。ご愁傷さまです。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

まあそのあとは言うまでもなく、世界最強の千冬さんの登場で1—1は黄色い歓声で包まれるのであった。

1時間目のIS基礎理論授業が終わって、アタシは箒ちゃんの所へ行くことにした。

「ほーおーきっ!」

「祐希か、久しぶりだな。」

「その口調も相変わらずだねえ。一夏くんの為にここまでやr...んぐっ!」?

箒ちゃんはものすごい速さで口を封じてきたっ!

「なっ、なななにを言ってるんだ、そ、そそんな訳ないだろう!」?

しかしアタシはうまくすり抜けた。

「...ぷはっ。でも事実でしょう? しかもバレバレだしねえ?」

「...! ? ぞ、それは...」

「好きなんでしょ?」

「...う、...ん。」

「もう話したの?」

「い、いや、まだだが... っておい。どこに行くんだ」

「アタシがきっかけを作ってしんぜよ」

「なっ、なあっ!？」

「いいから付いてくるの。いーちーかーくーんっ!」

アタシたちは机に突っ伏してる一夏くんのそばまで来た。

「な、なんだ。祐希、箒……。」

「あれえ、あれあれっ? 疲れてるのかな? ひっどい顔だちしてるねえ」

「お前笑ってたろうがっ! 人の苦勞を笑いやがって……。」

「いやいや、あんな自己紹介したお馬鹿さんが悪いんじゃないの? 違う?」

「うぐっ!?!…… 全くもってそのとおりであります」

「よろしい。そうそう、箒ちゃんが話があるってさ。ほら」

ここからは箒ちゃんにバトンプスだっ! 頑張れっ!

「あ、ああ。一夏、その…… ちょっといいか?」

「ん? あ、ああ。屋上でいいか? ここは辛いし」

「ああ、任せる」

「いつてらっしゃーい。」

そう言っアタシは二人を見送った。うーん、箒ちゃんは素直じゃないねえ。．．．ん？

視線を感じる．．．あの子は確か．．．思い出した。4組の「更識簪」さんだ。確か日本の代表候補生なんだけど専用機がないってあったような。視線の方向は、っと、一夏くんの席か．．．。もしかして．．．

「ねえ、本音ちゃん？」

「な〜に〜、ユツキィ〜？」

「更識簪さんの専用機の開発元ってわかる？」

「え〜っとね〜、おりむ〜とおなじだよ〜。」

やっぱりか．．．よし、ちょっと頑張りますかっ！

「ありがと。んでさあ、ちょっと教えて欲しいことがあるんだけど．．．」

「なあに〜？」

「気配の消し方」

「それはね〜、ごによごによ」

「なるほどね、やってみますか！」

「がんばれ、応援してるぞ」

簪
S
i
d
e

（織斑二夏．．．あの人のISで私のは．．．。）

1年4組の更識簪は『監視』するために1組に出向いていた。．．．
 と言っても教室の外からだが。

（クラスメイトが連れていった。．．．．．戻ろう。）

そう考えた瞬間だった。

「更識簪さゝん」

（!？．．．いつの間に背後に。しかも私に気づかれずに．．．。）

「ちなみにね、本音ちゃんに教えてもらったんだ。……気配の消し方。」

（確かに本音ならできる．．．。本音が知っていることが分かるなら．．．。）

「あ、あなたは……久遠祐希……？」

「うん、そうだよ。そうそう、はいこれあげる。」

渡されたのは小さなメモ。

「・・・なに?・・・これ」

「アタシの部屋番号だよ。放課後來てくれない? 相談に乗ってあげるから。・・・専用機について」

「・・・!??」

「じゃあ、待ってるからね」

「・・・待って!」

「ん? なに?」

「・・・なんで、・・・なんで相談に乗ってくれるの?」

「・・・アタシは困ってる人を放っておけないんです。ただそれだけ。じゃね♪」

そういつて彼女は戻っていった。

(・・・あの人なら、あの人なら一緒に考えてくれるかもしれない。
・・・)

そう思っていると予鈴のチャイムが鳴り響いた。

九話 入学初日 part 1 (後書き)

長くなった。

2・3回に分けて初日を書きます。

多分これは異例だろうと思う。

和利夫さん使わせてもらいました。

感想お願いします。

十話 入学初日 p a r t 2 (前書き)

祝！十話！

ではどうぞ！

十話 入学初日 part 2

祐希side

二時間目が終わった。アタシが一夏くんのところでISの授業内容について話していると・・・

「ちょっとよろしくて？」

む、誰だこの人。まあいいや、ただでさえ一夏くんはやばいから。それもそのはず参考書を電話帳と間違え捨ててしまったのだ。さすが一夏くん。

——ユウキ、反応してあげなよ、ね？

——そうだったね！

「いや、よろしくないです。」

さっすが一夏くん！息ピツタシ、完璧だね。アタシと一夏くんは軽くハイタッチした。よし、勉強再開だ、悠長などしている暇はない。

「・・・わたくしを無視するのですか？」

少しキレ気味に言ってきた。さっき返事したのになあ。

「すまない、今そんなに時間がないんだ」

「一夏くんやばそうだから教えてるの、邪魔しないでくれますか？」

「・・・！？貴方、わたくしを邪魔だとおっしゃいますの？」

言ったのに何度も言い返しやがって・・・という顔の一夏くんがそこにはいた。

「まず、君のこと知らないし、すまないな」

「ごめんね、アタシも」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「へえ、セシリア・オルコットさんね（か）」

よし、名前が分かった。覚えておこう。しかしこのタイプの人間はアタシは苦手だ。ISという力をもったからといって見下すのは良くないと思うなあ。それには一夏くんも同意見だったみたいで。また以心伝心の証としてハイタッチをした。

「で・・・このハイパーセンサーというのはですね・・・」

「ふむふむ、おお。なるほど。分かってきたぞ。お前教え方上手いな、だからこれは・・・」

「ちょっと！聞いてますの？」

全く、あなたこそ人の話を聞いていないの、と言いたくなる。

「なあ、セシリアさん・・・だったか？質問いいか？」

おっ、一夏くんナイスタイミング！

「ふん。下々のものの要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

あー、やっぱり苦手だ。というより何を質問するのかな？

「……………代表候補生って、何？」

がたたっ！聞き耳を立てていたクラスの女子数名＋セシリアさんがずっこけた。アタシは軽いため息をつき教えることにした。

「つて一夏くん、それさっきやったでしょ？前のページ」

「え？あ、ホントだ。なにに、『国家代表IS操縦者の、その候補生として選出される人のこと。』か。よし、覚えたぞ。」

「よくできました」

「そう！エリートなのですわ！」

あ、復活した。でもさあ、

「候補生でエリートは無いんじゃないかなあ？そしたら代表の立場が分かんなくない？」

「う…………。で、でも本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…………幸運なのよ。その現実をもう少し理解してただける？」

「そうか、それはラッキーだ」

「まった、一夏くん。私も一応それ相応の立場なんだけど……。」

「あ、そうだった。祐希もIS持ってるんだっけな」

「……………馬鹿にしますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか」

なあ、と言いながらアタシに振る。

ナイス！軽くサムズアップする。今のは効いたね、うん。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いてましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思ってましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「そもそも入試の時に初めて動かせたんだからそれは無理な期待じゃない？」

「う……………ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたたちのような人間にも優しくしてあげますわよ。ISのことで分からないことがあれば、まあ……………泣いて頼まれたら教えて朝仕上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「わからないことがあれば祐希に聞けばいいしなあ。そういえば入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

待って、確かそれは、アタシは・・・

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は・・・？」

「えっ？一夏くん倒したのっ！？」

「いや、倒したっていうか、いきなり突っ込んできたからかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのまま動かなくなったただけだが」

「一夏くん・・・それは倒したとは言わないでしょ」

「ん？　そういえばそうだな」

「わたくしただだと聞きましたが？」

話について来れなかったらしい、セシリアさんは。無理もないかなあ、シヨックだったみたいだし。
・・・あれ？

「女子っではってオチじゃないのか？」

「そうだった！アタシも教官倒したんだった！」

「え？祐希もなのか？」

「は．．．．．？」

「アタシの相手は山田先生だったんだ。もうギリギリ勝ったってところ」

「つ、つまり、わたくしだけではないと．．．．．？」

「うん、まあ。たぶん」

「いや、アタシは倒したから多分じゃないよ」

キンコンカーンコン。

あ、3時間目開始のチャイムだ。全然出来なかったなあ。

当然みんな、織斑先生に叩かれたくないので素早く席についた。

「それではこの時間は使用する各種装備の特性について説明する」

千冬さんの授業か．．．なんか参考になりそう。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

織斑先生がいうには、対抗戦だけでなく生徒会の開く会議や委員会への出席……クラス長のようなものらしい。まあ、アタシはしないけどね。で、ありそうなパターンは……

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「えっ!？」

「私もそれがいいと思います！」

「なあっ!？」

やっぱりこうなるよねえ。一夏くん慌てすぎ……。

「では候補者は織斑一夏……他にいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺!？ま、まってくれ!じゃあ、俺は久遠祐希を推薦します！」

うん、今のは聞き間違いだね。

「しかも、祐希は中学校三年間連続で学級委員でした!故に適任だと思います！」

なあっ!？アタシを売りやがったああああ!

「ほう、それは頼もしい限りだな。どうだ、他にいないのならこの二人で投票を行うか？」

うわあ、ヤバイヤバイ。

「待ってください！納得いきませんわっ！」

声の主……セシリア・オルコットだった。アタシと一夏くんは胸をなでおろした。

「そのような選出は認められません！久遠さんはともかく、大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

よし、そのままなっちゃえ！……ってあれ？

「……大体、文化としても後進的なくにで暮らさなくてはいけないこと自体わたくしにとって耐え難い苦痛で——」

カチン。あつたま来た。それは一夏くんも同じみたいだ、だから言っていた。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

よく言った！

「あつ、あつ、あなたねえ！私の祖国を侮辱しますの！？ 決闘ですわ！」

バアンツ!!

机を叩いたのは・・・アタシだった。

「あ? ちょっと待てや。ふざけないでよ? まず私たちの祖国を侮辱したのは誰だったわけ? ねえ?」

いきなりのアタシの行動にクラス内が静まり返った。無論先生も驚愕している。

——ユウキ・・・それはやりすぎじゃ・・・

——大丈夫、計算のうちだよ。威圧させておいたほうが動かしやすいの。

——・・・ほどほどにね

——りょーかい

「・・・!?・・・そ、それはっ」

「質問に答えられないのかな?・・・本音ちゃん。誰だったわけ、侮辱したのは? 言っても大丈夫だから。このクラスにいる生徒、先生が証人だから。ね?」

本音は関係ないから語尾は優しく言った。

「ん〜と、せっしーだよぉ〜」

「つまり、セシリアさんだね？」

「そーだねー」

「だってさ、セシリア・オルコットさん。決闘かぁ・・・私も参加させてもらえるかなあ？参加理由は『ここにいる日本人の代わりに戦う』ってことで」

「それなら俺もだ。『全世界の男を代表して』ということだ」

織斑先生はニヤリと笑い、こういった。

「よし、話はまとまったようだな。オルコット、お前は二人から挑戦状を受けている。しかしお前に拒否権はない。自選だからな。ということで来週の今日・・・つまり水曜日に織斑対オルコット、次の日に久遠対オルコットだ。久遠、織斑対久遠の試合はいるか？」

「いえ、すべての結果次第で」

「ふむ、妥当だな。それではこの日程で行く。それと織斑。お前の機体・・・つまり専用機を学園で用意することになったんだが時間がかかる。頭にいれておけ、いいな？」

「・・・！？・・・はい、分かりました。」

「それでは授業に入る。テキストを開け。」

こうしてそれぞれのプライドを賭けた戦いが決まった。

十話 入学初日 p a r t 2 (後書き)

眠いです・・・でも満足しています。
まだ初日編は続きます。

感想お願いします。

十一話 入学初日 part 3 (前書き)

いきなり寒くなって疲れが出てきた・・・。

ではどうぞ！

十一話 入学初日 part 3

祐希side

取り敢えずクラス代表決定戦をすることに決定したので、授業が始まった。

・・・ん？なんでアタシも参加してるのかなあ？この原因って一夏くんのせいだよね？

その本人はやっぱり授業内容が解らないようで、隙を見て私にアイコンタクトしている。

——全然分からん……。後で教えてくれ……。頼む！

多分そんな事を言っているのだろう。だからアタシはこう切り返した。

——アタシが戦わないといけなくなったのって……。だ・れ・の・せいかなあ……。！

一夏くんはアタシの瞳に修羅を見たようで、震えながら前に向き直った。

後でお話することにしよう。

空の色も赤くなりつつある放課後。取り敢えず色々？あった学校生活初日は終わり、アタシは寮の自室に戻り制服から私服へと着替える。青のジーパンに半袖のTシャツを着る。ジーパンは短パンタイプ。

これが一番動きやすい。アタシは『あの子』を待つことにした。

「ちゃんと来てくれるかなあ？」

確かあの子のISは打鉄式うちがねにしき式って言ってたっけ。

——スマイレ？

——なあに？

——ネットワークを使って打鉄式式の開発元割り出せる？

——オッケー。十秒ほどまって。・・・でたよ、ディスプレイで表示するよ

——ありがとっ

開発元は倉持技研か・・・ってうちの担当！？いつそんな開発してたっけ？開発期間は・・・ああ、その頃はSLドライブ作ってたっ

け。あれ以外の作業はしてなかった、うん。でも倉持技研なら、
・よし、奈々さんに電話しよう。

ドゴオオオン！・・・バンツ！

電話しようと思った矢先、隣の部屋から凄まじい音が聞こえた。

「・・・！？何の音！？」

そう思って部屋を勢いよく出ると・・・いかにも飛び出してきた様
子の一夏くんがいた。その顔は青白くなっている。

「どーしたのっ！？一夏くん！」

「ゆ、祐希か！？頼むっ！アイツを止めてくれっ！」

「アイツ？分かった、誰かわかんないけど止めてきましょう・・・
あとでアタシもお話するからね♪」

一夏くんは思い出したかのように動きを止める。

「うっ・・・。分かったから、止めてくれ頼む！」

「りょーかいっ」

アタシはドアを少し開けすぐさま入り、閉じる。正面を向くと・・・
『木刀が突っ込んできた』

「うわっ！？でも当たらないよっ！」

アタシは横によくて、『木刀』の持ち主の腕をつかむ．．．ってあれ？

「．．． 箒ちゃん！？ ってちょっとその格好！？」

「くっ、よけられた．．． って祐希？」

突進してきたのは箒ちゃんだった。しかし問題はそれではない。

「バ、バスタオルでその動きってどうなの．．．、じゃない！なんでそんな格好してんの！？ って、ま、まさか．．．！」

「ち、違う！ 何言ってるんだ祐希！ 私は何も．．．」

箒ちゃんは木刀を落とし必死に手振り身振りして反論した．．．．
．
がいけなかった。

箒ちゃんのバスタオルが床に落ちた。つまり．．．

「はあ．．． 良かったね、箒ちゃん。『今』の格好見られなくて、一夏くん」

「へ？．．．！？」

「取り敢えず着替えて、ね？ その後一夏くんをよんで話しましょう？」

「あ、ああ。分かった。すぐに着替える」

箒ちゃんは顔を真っ赤にして着替えに行こうとした。よし、追い打ちをかけてしんぜよ。

「箒ちゃん。・・・顔真っ赤」

「!?! ゆ、祐希い!」

「はいはい、今出ますよー」

やっぱり箒ちゃんは可愛い♪と思いながらアタシは部屋を出て、なぜか正座している一夏くんに近づいた。

「・・・取り敢えず止めてきたよ?」

「お、おお。ありがとう」

「・・・さてこの件は箒ちゃんが着替え次第話し合いになったから。それと一夏くん、アタシはもう一つ君とお話しなきゃならないんだけど?」

一夏くんは今の言葉を聞いて震え出した。

「は、はい・・・。」

「まあ、あの件はアタシも許せなかったからね。だから今回はお願い一つにしてしんぜよ」

ほっ、と息をつく一夏くん。だが甘いんだよねえ。

「そ、そうか、助かる。で、その内容は何なんだ?」

「決闘が終わったら、休みに遊びに行こうよ? いや、アタシ女の子

だからいわゆるデート？」

一夏くんは一瞬固まり、そして理解した瞬間・・・

「・・・な、なあっ!？」

「きみは断れる立場なのかなあ？」

「うっ・・・。。い、いいぜ。分かった、約束は守る」

よしっ、ファーストフェイズ終了! アタシの策略にかかったな!

「はい、約束ね♪ん? そろそろ着替え終わったかな? じゃあ入ろ?」

「いや、まず確認してくれないか? もう二度とゴメンだ」

「えゝ、一夏くんは女の子に興味ないのかあゝ」

「アアアアアア! ! だから違うって! !」

「冗談よ、冗談! 合図したら入って来てね?」

「まったく、分かったよ」

何かとこの二人弄りやすいし面白すぎっ! そう考えながらドアを開ける。

「ほーおーきっ! 終わったゝ?」

「あ、ああ。入っていいぞ」

「だってさ」

「お、おお」

さてさて着替え終わったところで三人揃ってベッドに腰掛け、アタシは事情を聞くことにした。途中喧嘩になりそうだったから仲裁をし、そしてこんな惨事にならないようある程度の線引きを決めた。

「・・・というわけで今回の件はもう終わりね。周りにも迷惑がかかるからしないよーに。分かった？」

「あ、ああ。分かった。善処する」

「おう、約束する」

二人とも仲いいのはいいけど喧嘩はしちゃいけないよ・・・と付け加えた瞬間、箒ちゃんも赤くなった。やっぱり可愛い♪一夏くんは箒ちゃんが赤くなったのを見て風邪でも引いたのかとも思ってるのかなあ。相変わらずの朴念仁、いや朴念『神』だね。

「それと、次こんな騒ぎがあったら・・・どうなるか分かるよね？」

二人は修羅を見たかのように青ざめて震え出した。

「「ぜ、善処いたします」」

お？ ナイスコンビネーションだね！

「よろしい！それと一夏くん、明日から放課後は箒ちゃんに剣道の指導を受けて」

「え、なんで？」

「なんでって、一夏くん中学ん時部活してなかったでしょ？バイトしてて。感鈍ってるだろうからね」

「あ、ああなるほど。ってなんでバイトしてたこと知ってんだよ！？」

「ん？独自の情報網だよ」

はあ、とため息をついた一夏くん。その隙を見てアタシは箒ちゃんに近づき小さな声で言った。

「（良かったね、一夏くんと『二人きり』の時間ができて♪」

聞いた瞬間赤くなる箒ちゃん。箒ちゃんが一夏くんを好きなのは初めて会った時から知っている。

「（・・・な、なっ！？）」

「（頑張っってね？ちゃんと教えられたらご褒美あげるから）」

「（うっ・・・。あ、ああ。頑張る）」

よし、セカンドフェイズ突破！これでよしっ、っと。

「なあ、祐希。ISについてはどうするんだ？」

そうだった、箒ちゃんが剣道の指導するから放課後は無理か。しかしアタシは既に考えてるのだっ！

「ん〜？それはね考えているよ。夕食終えたらアタシの部屋に来てくれれば基礎知識教えるから」

「そうか、分かった」

「分かってくれればいいですよっ、じゃあアタシは帰るね〜。」

「おう、じゃあな。また後で」

「ああ、色々ありがとな、祐希」

取り敢えず戻らないと。来てるかもしれないし。

十一話 入学初日 part 3 (後書き)

まだ初日は続きます。多分次で終わるだろうけど・・・。

多分簪の機体が変わります。大体の構成は変わりませんが。

感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679y/>

IS fusion

2011年12月3日20時55分発行